

新米バス運転手と少女達のShining Road

ことね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

静岡県沼津市・・・ここに一人の新米バス運転手がいた。

その名は「島 大樹」

彼はこの春からバスの運転手となったばかりの新人である。

そんなバス運転手の古い知り合いの高海千歌や渡辺曜などを含むスクールアイドル「Aqours」の輝きの道を記した物語である。

物語は大方、主人公の一人語り目線で進んでいきます。

時々説明のような語りになってしまいかもしれないですが、ご容赦ください。

シリアスは苦手なので日頃の光景での物語を書ければいいかなーと思つてます。

物語は導入編を除き、アニメ本編に沿って書く予定です。

初めて執筆する作品であるため、不慣れな点・文章作りであることが多いかと思いますが、よろしくお願い致します。

目次

序章

変わらない一日の始まり	1
変わらない一日の続き	4
一日に一度だけ通る道	7
変わらない一日の終わり	10
変わらない休日の朝	13
帰国子女と休日の運転手さん	16
特別編・番外編	
渡辺曜 誕生日特別編「全速前進ヨーソロー！」	20

序章

変わらない一日の始まり

序章

1話 変わらない一日の始まり

卒業や進級など新生活であわただしくなる直前である3月下旬のとある平日

朝9時過ぎ、いつもどおりに沼津市街地を出発するバス・・・

この時間は通勤や通学のピークが終わり、静かな時間帯である。

そんな沼津市街地と内浦地区を結ぶバスを動かす、それが僕の仕事である。

沼津駅南口を出て市街地を走っていると、いくつか先のバス停で数人の利用者がバスを待っているのが視界に入った。

運転手の仕事として自分のバスに乗らない人であってもバス停にお客様が待っている以上はそのバス停に止まらないといけないのである。

だが、その中にいる女の子は自分の知り合いである・・・と気づいたのはバス停に着いてお客様の乗車を案内してからであった。

「大樹君、おはヨーソロー！」

「おはよう・・・と言いたいけど後ろの人がつかえてるから早く乗ってね。」

朝から元気な挨拶をしてバスに乗ってきた女の子の名は、渡辺曜ちゃん

古くから付き合いのある知り合いの一人である。

彼女は内浦地区にある高校、浦の星女学院に通う高校1年生である。

彼女が乗ってから十数分経った頃、バスは市街地を抜け内浦地区へと入る。

しかし、平日この時間帯ということもあり、内浦地区へ入る前にはほとんどの人が降りてしまい、いつの間にか車内は彼女ひとりになっていたのである。

「次はシーパラダイス前、シーパラダイス前でございます。」

女性の音声放送が流れると降車を知らせるボタンが押された。

バスが停留所に近づくと見覚えのあるみかん色の髪をした女の子が見えた。

降車ボタンが押されていたため、バスを止め扉を開け降りるお客様を案内する。

「あーっ!! 大くんだあー!!」

扉を開け、運転手である僕の姿を見るなり驚いた女の子の名は、高海千歌ちゃん

曜ちゃんの幼馴染であり、彼女と同じ浦の星女学院の高校1年生である。

千歌ちゃんの姿に驚いている中、曜ちゃんが運転席近くへと向かってくる。

「ここで降りるってことは今日から春休みかい？」

「うん。今日は千歌ちゃんの家で遊ぶ約束しててさ。」

運賃箱に整理券を入れ、定期券を確認する。

これもれつきとした運転手の仕事である。

言われてみれば、朝の時間帯に全然学生が乗ってこないと思ったら春休みの時期か・・・と考えぼやく。

「だから学生が少なかったのか・・・」

「うん。そういえば、私初めて大樹君の運転するバスに乗った気がするよー。」

「曜ちゃんいいなー、私も大くんの運転するバス乗りたいよー。」

曜ちゃんと千歌ちゃんが僕に言う。

「まあ先月やつと教習を終えて、今週から一人で乗務するようになったからね。」

「今度私も乗せてよー。」

千歌ちゃんの言うことに、車じゃないんだから・・・と心の中で苦笑いをした。

「まあ千歌ちゃんはこれから乗る機会あるだろうからそのうち嫌でも乗る時が来ると思うなー。」

とかなんとか・・・ついつい話し込んでしまっていたら、出発の間が迫っていたことに気づく。

「おっと時間だ。それじゃあまたのご利用お願いしますね！」

「うん。頑張つてね!!」

「ヨーソロー!お気をつけてなのであります！」

曜ちゃんが降りたのを確認し、扉を閉めバスを出発させる。

そんな春先のいつもと変わらない一日が今日も始まった。

変わらない一日の続き

2話 変わらない一日の続き

千歌ちゃん、曜ちゃんに見送られてからおおよそ数分。

終着の停留所へとバスは着いた。

沼津市街地からバスを運転すること30分弱、やっと一仕事を終えたのである。

しかしこれで終わりではなく、これから十数分の休憩と出発待機を行った後に

沼津駅へと再度バスを動かさなければならないのである。

そして途中途中のバス停では、春休みと思われる学生や年配の方を乗せ、沼津駅に向けて来た道を戻る。

そして再度、30分ほどバスを動かして沼津駅へと到着したのであったが・・・

ミラーで車内を見てみると後部座席で二人の少女がぐっすりと眠っている光景が見えた。

あわててシートベルトを外し、寝ている二人を起こしに行く。

「お客様〜。終点ですよ。」

二人のうち、通路側に座っていた紅い色の髪の女の子の肩を揺さぶり声をかけた。

すると、紅い色の髪をした女の子が起きたのだが・・・

肩に手をあてたままであった為、紅い髪の女の子の顔が急に真っ青になる。

そして、次の瞬間

「・・・・・・・・・・ぴぎいいいいいいいいいいいいいっ!!」

小動物のような悲鳴で叫ばれてしまったのであった。

その悲鳴に驚いてしまった僕はとっさにその少女から離れたのだったが、段差を踏み外してしまいこけてしまうのだった。

悲鳴を聞き目がさめた窓側に座っていた栗色の髪の女の子が慌てて僕に駆け寄ってきた。

「運転手さん、大丈夫ずら?!?!」

「ああ、なんとか大丈夫です。それよりその子は平気ですか・・・?」
僕はこうみえても頑丈なのでたいした怪我とかはしていないかった。

だが、悲鳴をあげてしまった女の子のほうに心配であった為に栗色の髪の子に聞くと

「すいません・・・あの子は極度の人見知りです」

「あーそうなのね。なんかまずいことをしちゃったのかと思ってね・・・。」

などと会話をしていると栗色の髪の子が「むむっ!?!」という顔をして名札と顔を交互に見てきたので、

どこかで会ったことあるかなあと頭の中で考えていたら、栗色の髪の子が僕に質問をしてきた。

「もしかして・・・大樹さんずら?!?!」

とっさに自分の名前を呼ばれ脳内の記憶を掘り起こしてみる。

語尾にずらって付ける栗色の髪の子の知り合いつて・・・もしや?!?と思い出した所で

「ひよっとして、国木田さんの所の花丸ちゃんかな??!」

「そうずら!」

「久しぶりだね。元気そうだなによりだよ!」

栗色の髪の子の名前は、国木田花丸ちゃん

彼女もまた千歌ちゃんや曜ちゃんなどと同じく古くからの知り合いの女の子である。

しかし、最後にあつてから結構な年月が経っていたので自力では思い出せなかったのである。

そして、さつき起こした紅い髪の子が花丸ちゃんの後ろから小動物のようにひよっこりと顔を出していた。

花丸ちゃんが、紅い髪の子に声をかける。

「ルビィちゃん、運転手さんはオラ達が寝てたから起こしに来ただけずら。」

「ううっ・・・ルビィのせいで、ごめんなさい。」

「大丈夫ですよ!怪我はしてないから気にしない下さいね。」

しかし、涙目で申し訳なきような顔をする紅い髪の子を見かねて僕は自己紹介を試してみることにした。

「僕は島 大樹って言います。花丸ちゃんとは幼い頃からの知り合いなんですよ。」

「く……黒澤……る……ルビイです。」

紅い髪の子は黒澤ルビイちゃんと言う名前らしい。

そして騒動のうちにそろそろ車庫へと戻らなきやならない時間であつたことに気づく。

「あー二人ともごめんね。そろそろバス動かさなくちゃいけないから降りてもらえるかな?」

「あつー!ごめんなさい……。」

「ごめんずら……。」

花丸ちゃんとルビイちゃんの二人は慌ててバスを降り、僕も運転席へと戻る。

「二人ともごめんね!また時間ある時に話そうね。」

そう一言告げ、すぐにバスを走らせ車庫へと戻っていったのであつた。

そして車庫に着き、車内を点検していると二人が座っていた所にかばんが置いたままであつたことに気づき、一人ではやくのであつた。

「話しながらだつたから忘れていた事に気づかなかつたのか……。」

ちなみに、その数十分後に二人が忘れたカバンを取りに来たため事なきを得たのであつた。

一日に一度だけ通る道

3話 一日に一度だけ通る道

花丸ちゃん達が忘れ物を取りに来てから数時間。

数時間の休憩を終えた後は沼津駅から市街地を行ったり来たりする。

そして道路のアスファルトを照らしていた陽の光が

富士山のある西の方へと傾きつつある夕刻18時過ぎ、僕の運転するバスは

再び内浦地区へと向かっていたのであった。

「夕日がまぶしいなあ・・・。」

海沿いを走るバスからは沈みかかっている夕日が綺麗に見えるのだが

生憎にも、新米運転手である僕は安全運転を行うことを第一にしている為、

それさえも邪険に扱ってしまいがちである・・・。

バス停を通過したため、運転席の横にある自動放送のスイッチを入れた。

「この先、左に曲がりますのでご注意ください。」

今までの運転と違い、自動放送から注意を呼びかける声が聞こえる。

朝は直進してトンネルを抜けていた運行ルートだが、

夕方、この時間の便だけは左折しなきゃならないことを思い出して、ウインカーを出して左に曲がる。

誰も乗ってはいないのだが、注意喚起のためにマイクで放送を行う。

「左に曲がりますのでご注意ください。」

大きなバスのハンドルを左に回し、バスの方向を変える。

時に公共交通機関であるバスという乗り物は

利用状況や道路状況、あるいは周辺地域の教育機関へ通う学生など多くの事情を解決するために特殊な運行を行うことがある。

特に通学のために利用する人が多い時間のバスでは、わざわざその学校の近くを経由し

ご不便をおかけしないような運行ダイヤが組まれているのだ。

そして無論のことであるが、内浦地区から沼津駅へ向かうバスは始発バス停に近いほど、乗ってくるお客様は少ないのだが……。

「次は、浦の星女学院。浦の星女学院でございます。」

浦の星女学院高校へ向かう丘の下にはバス停があり、そこから通学の生徒さんに乗せるために通学の時間帯だけはバスが通るようになっていあるのがある。

すると、春休みであるはずのバス停には黒い長髪の学生がバスを待っていた。

バスを止めてドアを開けると、自分の知る後輩がバスに乗ってきたことに気づく。

「あら、大樹さんではありませんか。」

「久しぶりだね。ダイヤちゃん……。」

整理券を取った、黒い髪の凛々しい顔たちをしている女の子……もとい

清楚感があり大人な雰囲気を持つこの子は……黒澤ダイヤちゃん。僕の小学校の頃の後輩であり、僕の近所にある網元の名家の娘である。

彼女を乗せ、いくつかのバス停を通過したところで、降車ボタンが押された。

バス停でバスを止め、ドアを開ける。

そして、運転席の横に座っていたダイヤちゃんが降りるために席を立ち、傍にある運賃箱に整理券と小銭を入れる。

「ありがとうございます。」

「こちらこそ恐れ入りますわ……最近、朝の時間にお見かけしないとしまいましたら、いつの間に運転手になってらっしゃったのですか？」

社交辞令ではあるもののお客様にたいしてお礼の言葉を添えると、

やさしく微笑みながら質問をするダイヤちゃん。

やはり彼女には笑顔が似合うな・・・と心の中でつぶやく。

「なっ・・・!?そういうことを口にするなんて・・・破廉恥ですわ!!」
／／

突如として顔を真っ赤にしてしまったダイヤちゃんを見るなり、心の中で思っている事を口に出してしまうという、自分の良くない癖が出てしまった事に気づいて慌てて彼女に謝罪をする。

「ごめんごめん。まあ、今後はこの地区に来るバスも僕が担当する時あるからさ。」

これからもよろしく頼むよ。」

「い・・・いいえ、こちらこそ取り乱してしまい、申し訳ないですわ・・・。」
ダイヤちゃんがバスを降り、扉を閉めようとするところを振り向いた。

「そういえば、4月からわたくしの妹が浦の星に入学しますの・・・きつと大樹さんの運転するバスに乗ることがあるかと思いますがからよろしくお願い致しますね。」

「そうなんだね・・・妹さんによろしくお伝えくださいね。」

「ええ、それでは。」

ドアを閉め、バスを発車させる。

ふと思ひ、バスの進む方向に歩道を歩き始めたダイヤちゃんに対し、マイクのスイッチを車外放送に切り替えてこう言った。

「久々に君の笑顔が見れて良かったよ・・・。」

一言告げた僕は、サイドミラーに映るダイヤちゃんを見て顔を綻ばせて、再びバスを沼津駅方面へと走らせたのであった。

「久々に君の笑顔が見れて良かったよ・・・と言われるとは思っていませんでしたわ／／」

走り去るバスの運転手よりスピーカー越しで言われた一言に思わず「ふふっ・・・」と笑顔になってしまった黒澤ダイヤなのであった。

変わらない一日の終わり

ダイヤちゃんを降ろしてからひとつ先、千歌ちゃんの家のあるバス停に近づくとそこには朝も乗ってきた女の子達がバスを待っているのが目に入った。

バスの扉を開け、女の子達へと声をかける。

「今朝ぶりだね、それと千歌ちゃんは曜ちゃんのお見送りかい？」

「それもあるけど、もしかしたら大くんに会えるかなーって思ってます。」

「千歌ちゃん、あの話を大樹くんに話すんだって言ってはりきっちゃってさ・・・あはは」

やはりバスを待っていたのは曜ちゃんと千歌ちゃんであった。

僕としては会えるとは思っていなかったので、びっくり半面・嬉しさ反面・・・という感じはるが。

「でも、運転手が僕じゃなかったらどうするつもりだったのさ？」

「ふっふっふっ・・・千歌は朝のあの時間のバスの運転手とこの時間のバスの運転手さんは同じ人だという情報を曜ちゃんから仕入れているのです！」

と、自慢げに言う千歌ちゃん。

「確かに曜ちゃんなら分かりそうだけど・・・。それで、話ってなんなの？東京の方へ遊びに行くって話かい??」

「ええっ!?!どうして分かったのく!!」
どうやら、なんとなく言ったことが当たってしまったようであった。

「なんとなくだよー。でも千歌ちゃんならきつとそういう事ではしやぎそうだなーって思ったからさ。」

「むー・・・なんか子供扱いされた気がする。」

顔を少し膨らませながら、そんなことを言う千歌ちゃんを見ていると微笑ましくなってしまう。

「ふっふっ、そっかー・・・東京ねえ。」

数年前・・・ふと東京へ行つたときのことを思い出す。

あの時はスクールアイドル「μ's」の東京地域決勝を見に行つたんだっけなあ。

千歌ちゃんや曜ちゃんもスクールアイドルに出会うのかな・・・。

そんなことを考えていたら曜ちゃんはもうバスに乗っており、発車を待つただけであった。

「おっと・・・それじゃあバス出すね。」

「千歌ちゃん、またね!!」

「うん、二人ともまたね!」

バス停を離れ、沼津駅方面へと向かう。

珍しく、市街地へ入つても乗降するお客様は少なく、

幸か不幸かバスには曜ちゃん以外の乗客は誰一人居なかった。

そして、曜ちゃんが降りるバス停が近づいた。

バスをバス停に停め、運賃箱へと向かつてくる曜ちゃんが降り際にこう言った。

「大樹くん、やっぱり分かつてたんだね。」

「まあ、千歌ちゃんの言いそうな事はわかるんだ。幼馴染やってるからね。」

曜ちゃんも千歌ちゃんの幼馴染である為か、彼女の言いたいことは大方分かつていたみたいであった。

「あはは・・・そっかあ。」

「それでだ。もちろん、曜ちゃんも一緒に行くんだよね?」

「うん!千歌ちゃんのことはこの渡辺曜にお任せくださいでありますっ!」

「ホントかなあ?!曜ちゃんも一緒になってはしやぎそうな感じがするんだけど・・・」

「そ・・・そんなことないよ!!／＼／＼」

昔から変わらないやり取りをし、曜ちゃんはバスから降りた。

「まあ・・・楽しんでおいでよ、今度話を聞かせてね。」

「ヨーソロー!!ありがとうなのでありますっ!」

ドアを閉め、敬礼をする曜ちゃんを横目に最後の一仕事を終えにバスを発車させた。

そして、沼津駅へと着いたバスを車庫に回送させ、今日の仕事を終えたのであった。

だが、僕はまだ知らなかったのである。

彼女らが東京で見してきた物は、普通の日々を変えるきっかけになるということ。

変わらない休日の朝

翌日、陽が昇り始めた頃に目が覚めてしまった事に気づくと、僕は手元のスマホで時計を見る。

時計は朝の5時半過ぎを示していた。

昨日の仕事の疲れもあったのか、帰ってきてご飯と風呂を済ませた所までは覚えていたのだが・・・いつのまにか爆睡してしまったみたいだった。

「んー・・・眠れないし外にでも出るか。」

眠りすぎてしまったせいか・・・或いは寝れそうになかった為か、自前のランニングウェアに着替え、とりあえず外に出てみることにした。

空の東側から陽が昇り始めた頃、淡島に見える海岸沿いをランニングをしていた。

前方からランニングをする人が見えたため、道の端に避けたのだが・・・なんと、そのランニングをしていた人から声をかけられた。

「あつ、おはよー大樹！」

「あれ・・・果南じゃん。どうしたの？」

朝早くから僕に声をかけてきたこの子は、松浦果南ちゃん。

僕が唯一、名前を呼び捨てで呼んでいる知り合いの女の子である。

千歌ちゃんや曜ちゃん、僕とは幼い頃からの幼馴染であり、二人のお姉さん・・・のように昔から二人の面倒を見ていたとても優しい子である。

「朝早くから珍しいね、今日は休みなの？」

「うん・・・まあ目が覚めちゃったし。」

富士山を望みながら、内浦湾を見つめて他愛も無い会話をする。

昔から僕達二人はこうだった。

「てか、果南こそ今日も早起きしてランニング？」

「うん。日課だからね、毎日続けてるよ。大樹も一緒にする?」

「んー。体力そこまで無いからパス・・・とは言いたいけども今日くらいは付き合おうよー」

「本当!?嬉しいな♪」

果南よりも体力はないはずなのだが・・・何故か口に出てしまった。

「それにさ、果南と久々に話したい・・・からさ。」

「ふふっ・・・言われてみれば最近は大樹と会ってないからね。」

そして、僕と果南は朝焼けが海を照らしつつある春の朝を走り出した。

—————

二人で走り出して十分弱、浦の星女学院の坂の下までやって来た。

春の朝とはいえ、十分も軽くジョギングをすると汗をかいてしまう。

なによりも、体力があまり無いために息があがってしまう。

息を整える為に二人で岸壁に座り休んでいると、果南から声がかけられる。

「そういえば、バスの運転手になったんだって?」

「うん。つい今週からやっと一人でバスを動かしてるよ。」

「むー・・・就職した時も話してくれたのに、今回は私何も聞いてないよ。」

少しムスツツとした顔で拗ねる果南を見て、思わず笑ってしまう。

「なんで笑ってるのさ・・・私は怒ってるんだからね。」

「あははっ・・・ごめんね。久々に果南のいじけた姿見たから懐かしくなっちゃってさ。」

ふいに発してしまった言葉にしゅんとした顔をする果南を見ると二年前のあの出来事を思い出す・・・。

そして、しゅんとした顔のまま果南が僕にこう告げる。

「大樹・・・千歌達が東京へ行くって話は聞いた?」

「うん。昨日の夕方に二人から聞いたよ・・・。」

千歌ちゃんはやっぱり果南に東京へ行くことを言っていたらしい。

「まあ、振り返っても過去には帰れないし。大事なのはこれからを見

つめる・・・ことなんじゃないかな？」

「うん・・・。」

「それにさ、僕は変わらずに君らのお兄さんのようなポジション・・・でいたいと思ってるよ。」

我ながら、かなり恥ずかしいことを言ってしまった様な感じはするが・・・この際気にしたら負け、なのかもしれない。

果南と二人で話しながら道を走り、家の近くまで戻ってくる頃には太陽が東の山から顔を出し、朝焼けがキラキラと海を照らす頃になっていた。

「それじゃ・・・またね。」

「うん。」

果南と別れ、家へと向かう。

家の近くに咲く桜が、海風になびいて花びらを舞わせる光景に普通の日常と違う何かの訪れを感じていた。

「千歌ちゃん達は今日から東京へ出発するって言ってたっけ・・・。」
春先の変わらない風景を見ながら、家へと帰ったのであった。

帰国子女と休日の運転手さん

家に帰ると朝早くから体力を使う事をしてしまったせいか、シャワーを浴びるとソファで眠りこけてしまっていた。

そして夕刻近い時間になるまで寝ていたことに気づかず、電話機の着信音が鳴り響いたことよって目を覚ます。

「誰だよ・・・せつかくのんびり寝ていたのにさあゝ・・・。」

着信音で眠りから叩き起こされた僕は、不満をぼやく。

だが・・・生憎にも家には誰もおらず、仕方なく寝起きの眠い目を擦って電話機へと向かう。

普段なら着信先の電話番号を画面で確認するのだが、寝起きであった為にそれさえもせずに受話器を取ってしまう。

「もしもし・・・島ですけども・・・。」

「Hi!その声はダイキね!」

電話越しに聞こえる高めの声と英語が入ったような言い回しに懐かしい感じを覚え、ふとその少女の名前が浮かんだ。

「もしかして・・・マリーかい?」

「Yes!もちろんよ。久しぶりね、ダイキ!」

僕がマリーと呼んだ電話相手は僕の知り合いの中の一人。

そして今は内浦から海外へ留学している・・・その子の名は、小原鞠莉ちゃん

「いきなりどうしたのさ・・・マリーから電話なんて珍しいからビックリしちゃったよ。」

「ふふっ・・・実は今週から帰国しててね、それで少し話したいなあ・・・って思ったのよ!」

「まあ・・・予定は空いてるから平気だよ。」

「そしたら、17時に淡島の船乗り場へ来てもらえるかしら?」

「17時!?もうそんな時間なの!!」

「ええ、そうだけど・・・ひよつとしてSleepしてたのかしら?」

マリーに言われた事に驚き、壁にある時計を見ると時間は16時3

0分を示している事に気づく。

「まあそんなところかな。とりあえず、今から支度するね！」

「OK！それじゃあ待ってるわね！Chao!!」

相変わらずの突然の約束の取り付ける辺り、変わってないなあと思
いながらも支度をする為に、部屋へと向かった。

—————

そして電話が来てから30分後、淡島の入口に着いたのだが・・・

「マリーいないじゃん・・・」

車もバイクもないポツンとした定期船乗り場の駐車場を眺めな
がら、マリーの到着を待っていた。

すると、どこからともなくヘリコプターが飛んでる様な音が聞
え・・・その音がどんどん大きくなっていく事に気づく。

空を見上げるとピンク色のヘリコプターが着陸体制に入っていた
為、慌てて留まっていた場所から離れた。

ヘリコプターが接地をし、ドアが開く。中からは金髪の少女が降り
てきた。

そして直ぐに、その金髪の少女は僕へと抱きついてきた。

「ダイキ〜!!シャイニー☆」

抱きついてきたその子こそ、先ほど電話をくれた小原鞠莉ちゃんそ
の人である。

「いきなり電話来たからさ。行ってみたら、いきなり抱きつかれると
は思わなかったよ!？」

「そうは言うけど海外ではこれくらい普通よ。」

諸外国の当たり前が日本の当たり前なわけないでしょうに・・・と
心の中で思っているとマリーが僕から離れ、告げる。

「再会も済んだ事だし、出発しましょうかしらね。」

「へ???!!に???」

「ふふっ・・・行ってからののお楽しみよ♪さあ乗って乗って!」

マリーに背中を押されるがままにへりに乗り込む、シートベルトを締めるへりが上昇を始めた。

「これは・・・一体??」

「えっ、デイナーだけど?」

「それは見れば分かるけど・・・。」

数分間の空中浮遊を経験した後、何故かマリーのお付きにスーツを渡されて着替えをするように頼まれた。

そして、着替えてからとある一室へと通されたのが現状である。

「まあ・・・久々にダイキと会えたのだし、ゆっくり話したいと思ったのよ。」

「はあ・・・とりあえず、家に飯いらなくて連絡だけさせてくれないか?」

「Of courseよ♪」

家に承諾を貰い、久々に会ったマリーとデイナーを楽しむ。

そしてマリーと他愛も無い話をする。

「そういえばダイキ、Bus Driverになったんですって??」

「まあね。一応ついこの前から一人で乗務するようになったんだけどね。」

「そうなのね。それで、実は私も伝えたいことがあるの・・・。」

「ん?なんかあったの??」

「私、4月からこつちにまた戻ってくるから!」

「・・・えっ!?!」

突如として言われてしまった一言に驚きながらもスープを口に入れ、飲む。

「しかしなんでまたこつちに戻ってくるのさ?」

「理由はまだSecretよ!まあ、今日はその事前準備も兼ねてるのよ♪」

「はあ・・・これまたにぎやかになるねえ・・・。」

突如として言われた帰国の話・・・驚きつつもまたあの頃みたい
にみんなが笑顔になる。

そんなことを僕は思っていた。

でも、このマリーの帰国が、複雑に入り組んだ道をひとつに繋げ
る・・・。

そんなきっかけのひとつになるとはまた誰も知らなかった。

特別編・番外編

渡辺曜 誕生日特別編 「全速前進ヨーソロー！」

渡辺曜 誕生日特別編 「全速前進ヨーソロー！」

「……きろー!!……き、起きてよー!!」

とある日曜日の朝方、身体を揺らされる振動で意識が覚醒していく。

「頼むから……寝かせてくれ……。」

ふと、そんなことをぼやき、再び眠ろうとする……

「ふふっ……この曜ちゃんの前でそんな事をしていいのかな……えいっ!!」

ふと身体に感じる暖かさとちよつとした重さ……人が僕の上に乗っかってきているという事に気づくには時間がかからなかった。

寝起きで閉じたままの瞼をあけると、そこには見覚えのある顔と女の子特有の良い香りが漂っていた。

そして僕は、自分の目の前にいるのが自分の最愛の彼女であるということに気づく。

「……曜、おはよう。」

「おっはヨーソロー!!」

朝から僕を起こしにきたその相手は、渡辺曜

かれこれ幼い頃からの顔なじみの一人であり、今は僕の彼女

彼女が高校を卒業した頃から4年間ほどお付き合いをしている。

「それで、こんな早くからどうしたのさ……。曜だって知ってると思うけども、昨日僕は夜遅かったんだよ?」

「そうだよね……。朝からごめんね。」

ちよつと不満げに言ってしまった為か、彼女はシユンとしてしまう。

僕としてはそのような意図は全く無かった為、慌てて弁解に移つ

た。

「いや・・・その・・・決して迷惑とは思ってなくて・・・その・・・」
どぎまぎしてしまった僕を見るなり、彼女はにやっとした笑みを浮かべた。

「ふふっ・・・。それじゃあ・・・今日お出かけしない??」

「まあ、いいけど?どこか行きたい所でもあるの?」

「んー・・・特には決めてないかな。大樹は?」

「んー明日も休みだからちよつと遠出するか!」

「よつしゃ!どこに行くの?」

「んー。横浜とかどう??」

壁にかけてある時計を見つめる。すると・・・時刻は朝の8時半を示していた。

「そしたら、支度するからちよつと待っててくれる?」

「分かった。僕も支度するね!」

「了解なのでありますっ!」

昔から変わらない敬礼を見せ、曜は僕の部屋を出て行く。

机の上にある卓上カレンダーを見つめると日付は4月16日を示していた。

そつと、机の引き出しを開け、小さなケースを取り出す。

ケースを開け、銀色に輝く二つの指輪を見つめながら、僕はふと付き合った時の事を思い出していた。

最初の告白は彼女からで、本当にシンプルなものだった。

「私・・・ね。大樹くんの事がずつと好き・・・なの。」

夕日が内浦の海を真っ赤に照らし、雲ひとつない夕焼け空だった冬の日

ずつと気になっていた女の子に告白されてしまった・・・。

その事に僕は衝撃を受けて、立ち尽くしてしまった事を今でも覚えて
いる

「本当に・・・僕なんかでいいの?」

不安そうに曜ちゃんを見つめると、こう言われた。

「大樹くんじゃなきや・・・駄目なの／＼／」

「そつか。ちよつとだけ時間を貰ってもいいかな・・・?」

曜ちゃんが勇気を出して、告白してくれたのにも関わらず僕はすぐには答えを出せなかったのである。

「え?どうして?」

驚いた顔をする彼女の顔を横目にこう告げた。

「曜ちゃんが僕を思っている気持ちがい伝わってきて、本当に嬉しいんだ・・・でも、僕が本当に曜ちゃんを好きなのか?・・・という事についてちよつと考えたいんだ。」

「・・・そうだよね。突然言われても困るよね・・・。」

告白された時、しゅんとする曜に対して申し訳なきを感じたのだが、同時に自分への不甲斐なさというのを感じていた。

「ごめんね。別にこれからも変わらずにうちに遊びに来てくれて構わないし、曜ちゃんの事が嫌いという訳じゃないんだ・・・でも、結論だけは少し待っててくれないかな?」

「うん。分かった・・・。」

自分の中で、中途半端な気持ちで付き合ってしまったては曜ちゃんの気持ちに申し訳ない・・・。

そのような気持ちがあつた為・・・その場で返事は出来なかった。

それから数日が経つたある日、僕は不意に倒れてしまう。

しかも父親が出張、母親が旅行へ行っている為、家には誰もいない・・・。

そんな最悪のタイミングでだった。

曜がたまたま遊びに来た曜がそれを見つけ、看病してくれた。

本当に些細なきっかけだったが、その時、僕はこの子が大好きであり、僕のことを大切にしてくれる子なんだな・・・ということに気づいたのだった。

むしろ、この事にすぐ気づけなかったことを後悔した。

そして体調が治つた後、すぐに彼女へ自分の気持ちを伝えた。

他人に自分の気持ち伝えるなんて事は初めての事で、自分がそんなに上手く言葉を紡げるとは思ってもいなかった。

今でもあの時自分がなんと彼女に告げたのか・・・ということはい出せない。

だが、自分の気持ちの数々を彼女に告げた後、彼女が嬉し泣きをしていたという事実だけは今でも覚えている。

それからの毎日は、新鮮でとっても充実していた。

アウトドア派である彼女は、暇さえあれば僕を遊びに誘う事が多かった。

時には沼津から抜け出し、東伊豆地域、静岡市内や浜松市内・・・時には県内から出て関東地方へ行く等、本当に色々な所へ出かけた。

最初に二人で遠くに出かけたのは横浜・みなどみらい・・・あそこで二人きりで見た夜景は鮮明に記憶に残っている。

僕としても曜のエネルギーな性格が僕にとっては刺激を貰うばかりで、彼女という毎日がとっても楽しかった。

いつからかそんな彼女が愛おしくて仕方なかったのかもしれない。そんな事を思い出しながら、着替えを済ませ、先の小さなケースの

蓋を閉じて、カバンにしまって、一人で呟く。

「あの時の約束は今日果たす・・・。」と

「おーい！準備できたよ!!」

曜が扉越しに声をかけてきたので、慌てて部屋を出る。

「いまいくよー!!」

そして僕達は、横浜へと出発した。

—————

時間は午前10時過ぎ。

沼津から東名高速を上り、1時間近く見覚えのある大観覧車と超高層ビル群が見えてきた。

横浜駅に隣接するデパートの地下駐車場に車を停めて、電車で見な

とみらいへと移動する。

その最中、懐かしさに思いを馳せていた時、曜がこう言った。

「そういえば、付き合ってから初めて出かけたのってみなとみらいだったよね。」

「うん。今でも覚えているよ。あの時の曜、少し緊張していたよね。」

「えーっ！そ……それはだつて／＼ 大樹と付き合ってから初めて遠くへ出かけるってなったから緊張しないわけないじゃん！！／＼」

「ふふっ……本当に曜はそういう所が可愛いからなあ……。」

「ナチュラルに褒められると……なんか、照れちゃうよ／＼」

傍から見ればバカツプル……に見られそうなり取りをしていたら降りる駅へと到着した。

懐かしさを感じて……二人してあの頃のことを思い出しながら、色々と巡る。

超高層ビルにある展望台や赤いレンガの倉庫などに行き、公園から水上バスに乗る。

「ん〜!! やっぱり海風は気持ちがいいね!!」

「そうだね。やっぱり曜は海が一番似合うなあ……。」

「えへへ……／＼ 大樹にそう言われると……なんか嬉しいなあ／＼」

「そうだ。夕食なんだけどき、美味しいハンバーグのお店見つけたからそこに行かない?」

「ハンバーグ……!? 楽しみなのでありますっ!」

曜の笑顔が見れるだけで、遠出をしに来た甲斐があったと思わされてしまう。

そして夕食を済ませ、再び二人で日が暮れた街を歩く。

そして、大きな観覧車がある遊園地へとやってくる。

「そういえばここも初めて来た時寄ったよね。」

「うん。確か頂上付近で一回止まっちゃったんだよね・・・あはは。」
観覧車に乗る為、列に並んで待ちながらこの話題でずっと話していた。

そして、観覧車へと乗った。

ふたりつきりになってすぐに曜がこちらへと近づいてくる。

「ねえ・・・大樹。」

「ん？どうした?？」

僕の隣に腰掛け、肩に頭を乗せてくる。

「少しだけ、こうさせてくれない?／＼／＼」

「いいよ。今だから出来ることだしね。」

観覧車が半分くらい上昇した時、僕は話を始める。

「実はさ・・・今日ずっとデートしながらね。初めて来たことを思ってたんだ。」

「うん。私も実は思ってたよ。」

そう・・・初めて来た時もこの観覧車に乗った。

そして、曜が突然泣き出した・・・という事があった。

実は初めて二人で来た時、曜が少し緊張していたのもあって、疲労が普段より溜まりやすくなっていた。

しかし、僕は初めの頃はそれに気づけず、曜が無理して歩いているのに気づいた時は自分を責め、酷く悔やんだ。

だが、自分を責めた所でどうにもならなかったので、予定を変えて早めに切り上げようとし、二人で観覧車へと向かった。

乗った途端、曜が突然目に涙を浮かべ泣き始めてしまう。

慌ててしまった僕は咄嗟に彼女に対して、謝罪の言葉を述べてしま
う。

「曜ちゃんごめん・・・！俺がもつと早くに気づければこんなことには
ならなかったのに・・・！」

謝罪を述べる僕に対し、曜ちゃんはこう言ってきた。

「ううん・・・違うの。私が無理して、我慢せずに大樹くんに言ってい
ればこうならなかったから私のせいだよ・・・。」

渡辺曜という少女は周囲からは多才な人物と思われているのだが、以前に千歌と梨子が親密になっていくの見て疎外感を感じてしまい、悩んでしまう子であった。

それが幸いしたのか、僕にとっても同じようなことをしてしまっていたみたいであった。

「そんなことはないよ。曜ちゃんという僕の彼女の性格をしつかり把握できていなかった僕が悪いんだし……さ？」

「でもっ……私のせいでせつかくの遠出が台無しになっちゃって……ううっ。」

泣きながらそう言う曜ちゃんを僕はぎゅっと優しく抱きしめ、こう告げる。

「曜ちゃん……いや、曜。僕はね、君と付き合ってから毎日が楽しくて、刺激的でさ……君と居られるだけで本当に幸せなんだ。君の笑顔にずっと力を貰っていたんだ……。だから、君には笑っていて欲しいんだ。僕の前では二度と絶対に悲しい涙は見せたりなんか絶対にさせない！次に泣かせるのは嬉し泣きって、今そう決めた！……だから、顔を上げて？」

カバンからハンカチを取り出して、曜の涙を拭く。

そしてこう告げる。

「今日から僕は！君の事をちゃん付けで呼ぶのはやめる!!何故なら、対等でありたいから!!」

大声で宣言すると曜は思わず笑い出した。

「あははっ……なにそれ〜！じゃあ私も呼び捨てで呼んでいいかな？……大樹／＼／」

ちよつとした蟠りが解け、二人で笑いあった。

「あはは……そんなこともあったね。」

「うん、それでさ……。」

疑問符を浮かべて首をかしげる曜を横目に僕はカバンから小さなケースを取り出してこう言った。

「あの時に決めた約束、果たして良いかな？」

ケースを開くと、銀色に輝く指輪が二つ入っていた。

「え・・・もしかして・・・それって」

震えそうな声で涙を浮かべる彼女を見つめながら、優しい顔で話を続ける。

「次に曜を泣かす時は嬉し泣き・・・ってあの時言ったよね？覚えているかい??」

「うんっ・・・指輪が二つあるってことは・・・そういうことだよね?」

「本当はね、明日言いたかったんだ。大事な日だからさ。」

「明日・・・?もしかし・・・んっ／＼」

最後まで言い切らないうちに僕は彼女の口を塞ぎ、キスをしてこう告げる。

「一日早いけど、誕生日おめでとう曜!!そしてこれからもずっと一緒に・・・人生という大海原を航海しませんか?／＼」

照れながら僕は彼女にそう告げる。

すると彼女は、ケースの蓋を閉じて、ポケットに入れて僕へと抱きついてきた。

「ヨーソロー!!／＼／＼これからもずっと一緒にいようね!!約束だ

よ・・・?／＼」

「もちろんさ!!」

こうして僕らは新たな関係へと進展したのだった。

時は流れ、あの告白から3年が経った。
僕は市内を走る路線バスだけでなく、都市間を結ぶ高速バスの運転も行うようになった。

以前より、仕事の量や時間が増えた。

だが、以前より充実した毎日を送っている。

朝起きて、妻の料理を食べて出勤する。

その前に日課となってしまうたことを行う。

「よし!行って来るね!!・・・今日も無事故で安全運転に努めるであり

ますっ!!」

「ヨーソロー!!いつてらっしやい!・・・無事に帰ってきてね!!」

まるで出庫前の乗車点呼のようなやり取りではあるが、結婚してから仕事に行くときと帰ってくる時は必ずこれを行っているのである。

自分自身の安全を確保するだけでなく、利用してくれるお客様の為に・・・。

そして、家で自分の帰りを待っている・・・家族のために。

渡辺曜 誕生日特別編 ” 完 ”